

軍記物語の女性たち（3）

阿野廉子（新待賢門院 通称；れんし）

—『太平記』—より

岡崎 嘉彦

廉子は応長元年（1311）、平安貴族阿野公廉の娘として生まれた。元応元年（1319）、後醍醐天皇の中宮西園寺禰子の入内に際し、側付きである上臈として参内する。才色兼備で、やがて禰子をも押しのけて後醍醐天皇の寵愛を一身に集めるようになり、人々から皇后のように見なされるようになった。天皇との間に恒良親王・成良親王を生み、嘉暦三年（1328）には、三男義良親王（後村上天皇）を設けている。元弘元年（1331）の元弘の変の後には、公家政治の復活を果たせなかった天皇が配流された隠岐に赴く。鎌倉幕府が滅亡した後の建武の新政では、天皇の側で権勢を誇り政治的な影響力を及ぼすようになる。天皇の崩後は、後村上天皇の生母として南朝の皇太后となり、その後は南北動乱の中、波瀾の日々を過ごしたが、正平六年（1351）南朝方から新待賢門院の院号を授かった。その後、正平十二年（1357）、身体の不調により出家して、同十四年（1359）に崩した。この時代の和歌の大集『新葉集』に二十首がある。

みよし野は見し世にもあらず荒れにけり
あだなる花は猶のこれども

吉野を足利氏に攻められた南朝は、さらに山奥の賀名生に遷居した。翌年の春、後醍醐天皇の塔尾御陵に参拝しようと、吉野に戻ると皆、兵火に焼かれ灰燼に帰っていた。しかし、御陵のほとりの桜は昔と変わらずに咲いていると哀れに感じ、義理の子の宗良親王に贈った歌。

廉子は『太平記』の登場人物の中で異彩を放っている。男性が中心である『太平記』の中で、幾人かの主人公の中で唯一人登場する女性として、その人物像が見いだせる。

後醍醐天皇の最愛の女性として、時代の栄華を極め、天皇の母になるものの、建武の中興の

失政により、たびたび戦乱に巻き込まれていく数奇な運命を辿ることとなる。その戦乱の最中、廉子は二人の皇子が足利方によって毒殺され、深い悲しみに包まれる。しかし、廉子は気丈にも権力闘争の表舞台から去ることはなく、南北朝争乱が起り、足利氏の台頭によって南朝が苦難の時代になった際にも敏腕を振るい南朝方の心の支柱となっている。また、後醍醐天皇亡き後も度々、南朝の危急を救う政治的な手腕を示しており、廉子は単に天皇の母というだけではなく、南朝を動かす人物になっていた。皇権の回復という後醍醐天皇の理想の実現を目指し、父帝の志を継ごうとする後村上天皇にとって、共に父の追憶・ありし姿を伝えてくれる女性であり、政治を行っていく上で最大の助言者でもあったのである。廉子が崩御した際には、三年間『諒闇の儀』を行い、手厚い仏事が取りおこなわれた。こうした廉子については『太平記』の中でも批判が多くあり、功罪相半ばする女性といえるが、この乱世にあって大きな存在感を持った女性だった。

また、廉子の歌は平凡ではあるが、愛する天皇を追慕する気持ち、我が子を案じる気持ちが満ちている。気が強く、二人の子を失うも悲嘆にくれず、南朝をまとめ上げた敏腕な女性というイメージが強い廉子であるが、残した歌の一面からは一人の女性として・母としての想いや世の中での悩みが伝わってくる。

時しらぬ嘆きのもとにいかにして
かわらぬ色に花の咲くらむ

■主な参考文献、そして、今回おすすめる図書

○円地文子監修『人物日本の女性史5

政権を動かした女たち』集英社 昭和52年。

おかざき よしひこ（司書・情報サービス課）